

毎年、素盞雄神社などで行われている「奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会」が、昨年度は奥の細道千住あらかわサミット記念イベントのなかで開催された。審査員となった会場が軍配型団扇を使って判定し、おおいに盛り上がった

広報担当おすすめスポット

“わたしのまち”

荒川区

俳句のまち あらかわ

松尾芭蕉、小林一茶、正岡子規など俳句ゆかりの地で広がる俳句文化

平成27年に「俳句のまち宣言」を行った荒川区は、小林一茶や正岡子規など多くの文人が訪れ、俳句を詠んだ、俳句にゆかりのある地です。区内には、南千住の素盞雄神社にある松尾芭蕉の奥の細道矢立初めの句碑など、文人たちの句碑が多数残されています。また、誰でも気軽に気持ちを俳句で表現できるような区内各所に投句箱が設置されたり、子どもから大人まで俳句に親しむ文化が育まれています。



庁舎や各図書館などに設置されている投句箱。

俳句にゆかりの深い場所、荒川区

平成27年3月、南千住駅前に新たな観光スポットが誕生しました。春の暖かい陽気の中お披露目されたのは、1m90cmの松尾芭蕉像。10日後に荒川区で開催された「奥の細道千住あらかわサミット」を記念して建てられたものです。半年かけて制作した彫刻家の平野千里さんによると、写真を撮りやすく親しみやすい作品になっているそうで、これから奥の細道へと旅立つ芭蕉が、遙か奥州へ思いを馳せて、矢立初めの句を詠む姿を表現しています。

芭蕉が残した『おくのほそ道』には、「千じゆと云ふ所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそぐ」と記されています。

荒川区は、元禄2年（1689年）、江戸を出た芭蕉が旅へと出発した場所とされる千住大橋のもとであり、南千住にある素盞雄神社には、この時芭蕉が詠んだ「行く春や鳥啼き魚の目は泪」の矢立初めの句碑があります。

南千住駅西口駅前広場では、披露される芭蕉像をひと目見ようと約100名の人々が集まり除幕式が行われ、会場は拍手喝采となりました。式典後、芭蕉像の前には記念写真を撮る人々で人だかりができ、新たな観光スポット誕生を祝福していました。

このほかにも区内には、小林一茶や正岡子規など名だたる文人たちが訪れ、



松尾芭蕉

現在の三重県伊賀市出身の江戸時代に活躍した俳人。弟子である曾良を伴い、元禄2年3月27日(1689年5月16日)、慣れ親しんだ深川を立ち、東北、北陸を巡り岐阜の大垣まで旅して「月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり」で始まる日本文学史上最高傑作ともいわれる紀行文『おくのほそ道』を残した。



俳句のまちを宣言

四季の情景を俳句に詠んだ地がたくさんあり、多くの句碑が残されています。江戸時代、景勝の地であったことから「月見寺」とも呼ばれた西日暮里の本行寺には、小林一茶や種田山頭火の句碑があり、また、夏目漱石や司馬遼太郎など多くの作品に登場する日暮里の羽二重団子の本店には、正岡子規の句碑が残されています。

このように俳句にゆかりの深い荒川区ですが、平成27年3月14日、松尾芭蕉の『おくのほそ道』紀行300周年を契機に始まった、奥の細道サミットの27回目が「奥の細道千住あらかわサミット」として区で開催されました。

この奥の細道サミットとは、奥の細道ゆかりの区市町村など38団体が芭蕉の素晴らしさをたたえ、その功績を広く内外に発信するために昭和63年より始めたもので、第1回は奥の細道結びの地である岐阜県大垣市で開催されました。そして第2回は山形県鶴岡市、第3回は岩手県平泉町…と続き、27回目となった昨年は、奥の細道矢立初めの地としてゆかりのある荒川区で開催されることになりました。

サミット当日、予選を勝ち抜いたかわいい小学生俳人たちがトーナメント形式で俳句横綱の座を競う「奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会」や、俳人・有馬朗人ありまあきとさんの「芭蕉と世界に広がる俳句」をテーマにした記念講演会、約1000句の投句があつた「矢立初めの地あらかわフォト俳句コンテスト」の表彰式などさまざまな記念イベントが開催され、会場はおおいに盛り上がりました。

また区では、松尾芭蕉だけでなく、小林一茶や正岡子規など多くの文人が訪れ、俳句を詠んだ俳句にゆかりの深い地であることから、俳句のまちであることを区内へ強く発信し、子どもから大人まで俳句文化の裾野を広

げ、豊かな俳句の心を育むことをめざして「荒川区俳句のまち宣言」を発表しました。区では毎年「子ども俳句相撲大会」が開催されたり、荒川ふるさと文化館で夏休みに「俳句をつくらう!」とい

うイベントが実施されるなど、子どもたちが俳句に親しむ土壌が培われています。こうした荒川区の俳句文化のさらなる振興のために、ほかにもさまざまな取組が行われています。



奥の細道旅立ちの日記念バスツアー



芭蕉ランチ



奥の細道矢立初めの地子ども俳句相撲大会



都電DE俳句

芭蕉の大橋渡り



俳句に親しむイベントの開催

区では千住大橋鉄橋化80周年記念事業として、平成20年より南千住地区で「子ども俳句相撲大会」を開催しています。毎年この日のために練習を重ねてきた子どもたちは、自作の俳句を吟じ合い、横綱の座を競うことで俳句に親しみ、感性や表現力を育んできました。はかま姿で俳句を吟じたり、ランドセルを背負って登場したり、傘やビニールの小道具を使用するなどただ俳句を披露するだけでなく、趣向を凝らした演出が好評なイベントです。平成28年は3月12日に開催され、予選には217チーム434人の応募があり、芭蕉に負けにくいぐらいの素晴らしい俳句が勢ぞろいし、観客をうならせました。

それ以外にも、区では俳句に親しむイベントが多く開催されています。芭蕉が旅を開始した5月16日(旧暦3月27日)には、『おくのほそ道ゆかりの地をめぐる「バスツアー」や千住の街を歩く「まちあるきツアー」などの旅立ちの日記念事業や、芭蕉の格好をしてこちらから旅に出发した当時に思いを馳せながら千住大橋を渡る「芭蕉の大橋渡り」などさまざまなイベントを開催しました。

また、区役所内のレストランでは、平成26年8月から翌年3月まで月替わりで奥の細道ゆかりの特産品を使ったメニュー「芭蕉ランチ」を提供しました。1月の荒川区の伝統野菜・三河島菜を使ったメニューの際は、初日の販売開始前から列ができ、「おいしかった」「毎日食べても飽きがこないと思う」と好評でした。

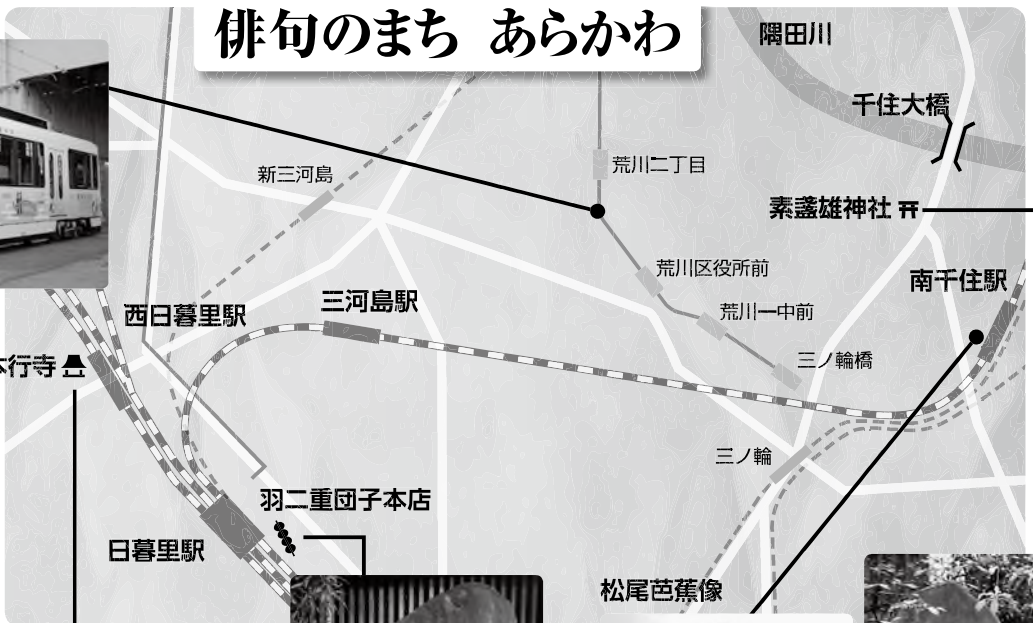
平成27年11月からは、芭蕉の格好に扮した区のシンボルキャラクターや芭蕉と弟子の曾良が千住大橋を渡っているイメージの絵などを都電の車体に配したラッピング都電の運行が開始されました。平成28年1月、このラッピング都電で俳句会「都電DE俳句」が開催され、参加者たちは都電内での俳句講座を受けた後、あらかわ遊園など沿線の観光スポットを俳句を詠みながら巡りました。

この他にも、区主催の投句事業「あらかわ俳壇」なども開催されています。今後も区では句碑の建立や俳句関連のグッズの作成など、俳句のまちとして訪れた人に楽しんでもらえるような仕掛けづくりを企画しており、区内外に「俳句のまちあらかわ」をPRしていきます。

俳句ラッピング都電



俳句のまち あらかわ



種田山頭火の句碑
「ほっと月がある東京に来てある」



小林一茶の句碑 「陽炎や道灌どのの物見塚」



正岡子規の句碑
「芋坂も団子も月のゆかりかな」



松尾芭蕉像



松尾芭蕉の句碑
「行く春や鳥啼き魚の目は泪」